

1. 神はわれらの避け所、また力。
苦しむとき、そこにある助け。
2. それゆえ、われらは恐れぬ。
たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。
3. たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、
その水かさが増して山々が揺れ動いても。 セラ
4. 川がある。
その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。
5. 神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。
神は夜明け前にこれを助けられる。
6. 国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ。
神が御声を発せられると、地は溶けた。
7. 万軍の主はわれらとともにおられる。
ヤコブの神はわれらのとりでである。 セラ
8. 来て、主のみわざを見よ。
主は地に荒廃をもたらされた。
9. 主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。
10. 「やめよ。
わたしこそ神であることを知れ。
わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」
11. 万軍の主はわれらとともにおられる。
ヤコブの神はわれらのとりでである。 セラ

説教

詩篇46篇は、宗教改革者ルターがこれを題材に讃美歌267番「神はわがやぐら」を作ったことで有名です。

詩人はまず最初に、全体の主題となる内容を告白します。

1. 神はわれらの避け所、また力。
苦しむとき、そこにある助け。

「避け所」は「避難所、シェルター」の意味で、「力」は「物理的肉体的な力、政治的な権力、実力」あるいは「砦、櫓、城」を意味します。そして詩人は、神さまが「貧困と苦難の中で発見するところの大いなる救い」(直訳)であると言います。つまり、詩人にとって神さまは、自分が最も苦しい時に必ずそこに改めて見出すところのシェルターであり、自分をかくまってくれる城壁そびえ立つ城であり、現実に窮乏と苦しみから救い出してくれる極めて力強い「助け」だ、と言うのです。

それで、詩人はこの地上でどんなことが起こっても恐れぬと告白します。

2. それゆえ、われらは恐れぬ。

たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。

「それゆえ、われらは恐れぬ。

地が変わり山々が海のまなかに移る中であつて。」(2節直訳)

地震が起き、地殻変動によって、私たちの立っている地面が海のと真ん中に移る(5,6節の「揺らぐ」と同語)となれば、よほどでなければそうなり得ませんが、詩人は現にそのような激動の境遇にあったのかも知れません。しかも3節を併せ読むと、

3. たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだつても、

その水かさが増して山々が揺れ動いても。

地面が海にすっぽりと飲み込まれてしまうのみならず、「その水が荒れ狂い、煮え立ち、その水かさが増して山々が揺れ動いて」(3節直訳)いる激しい状況にあったわけですから、これはもう足が地に着かないどころか、全く宙をさまよってしまっている状況と考えられます。しかし、それでも詩人は「恐れることがない」と言います。

どうしてでしょうか。神がシェルターだからです。神さまが堅固な城であり、大いなる助けであるからです。

次に、詩人は、自分が揺るがないばかりか、神がその真ん中におられることにより神の都エルサレムも「揺るがない」と告白します。

4. 川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。

5. 神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。

神は夜明け前にこれを助けられる。

都のいのちは水です。水が豊かに供給されるほど、都の生活は平安と喜びに満たされたものとなります。そして、豊かに水を供給してくださる神さまがその中心におられる神の都は、揺るぐことはありません。たとえ敵に攻められて存亡の危機にさらされたとしても、神さまは人が戦いを始める「夜明け前に、これを助けられる」のです。

6. 国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ(移った)。

神が御声を発せられると、地は溶けた。

かつてアッシリアがエルサレムを攻めた時、隣国の北王国は既にアッシリアの支配に屈し、その他の周辺諸国もアッシリアの支配下に入れられた国際的な激動期でありました。どこがどこの国なのかかわからないほど混沌たる有様でした。そして、その荒れ狂う嵐にエルサレムも飲み込まれ、この地上をどこまでもさまよふかと思われたのです。しかし、揺れに揺れた激動を制したのは神さまでした。「神が御声を発せられると、地は溶けた」(6節後半)のです。神さまのみことばによって、一夜にしてアッシリアの大軍は討ち滅ぼされ、戦乱は平定されたのでした(イザヤ書37章36節参照)。

これを受けて、詩人は告白します。

7. 万軍の主はわれらとともにおられる。

ヤコブの神はわれらのとりでである。

「万軍の主」とは「戦いの主、戦争の神、軍隊の統率者」というような意味です。たとえ、大国と呼ばれる国があり、世界最強の軍隊を保持して世界征服を企んでいるとしても、真に最強の軍隊は神の軍であり、その神の軍をすべて指揮しておられる神さまこそが世界最強です。ですから、万軍の主が我らとともにおられるということは、まさに恐れるものが何もないということになります。揺るぐことはありません。「ヤコブの神はわれらのとりで」なのです。「とりで」と訳される言葉は、「高くする、強くする」を意味する動詞から出来た言葉です。この不安定な地上の生活の中で、神さまが、特別に一段高い所に引き上げて、波に飲まれないよう守ってくださっていることを意味します。

ここから発展して、詩人はさらに世界的な平和を展望します。

8. 来て、主のみわざを見よ。

主は地に荒廃をもたらされた。

9. 主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。

「荒廃」と訳される言葉は「ぎょっとすること、肝を冷やすような出来事、すさまじいこと、恐ろしいこと」を意味します。そしてそれが「主のみわざ」であり、それを「来て、見よ！」と詩人は呼びかけます。かつてアッシリアに対するユダの奇跡的な勝利をもたらしたように、人の常識でははかり知ることの出来ない、人知をはるかに超えた恐ろしい出来事を起こすことによって、神さまはこの世界に戦争をやめさせて、「弓、槍、戦車」といった戦争の武器を「へし折り、断ち切り、火で焼かれる」のです。

10. 「やめよ。

わたしこそ神であることを知れ。

わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」

「やめよ。

わたしこそ神であることを知れ。

わたしは国々の間で高くされ、地の上で高くされる。」（10節直訳）

「やめよ」とは「力を抜け、手を下ろせ」の意味で、要するに武装解除の命令です。人の一切の高ぶりを打ち砕いて、神さまだけが高くされると言います。

そうして、詩人はあらためて自らの確信を告白します。

11. 万軍の主はわれらとともにおられる。

ヤコブの神はわれらのとりでである。

こうして、我らの避難所、シェルター、櫓、城、苦しみの中でいつもそこに見つけ出す圧倒的な助けと詩人が告白した神さまは、単に絵に描いた餅ではなく、言葉だけの世界ではなく、あるいは詩人にとってのかけがえのない心の支えというにとどまらず、詩人の個人的な問題、貧困や苦しい現実を解決してくれるばかりか、エルサレムの危機という国家的な問題を一気に解決してくださるのに加えて、さらには戦乱に満ちた世界に戦争を無くして完全な平和を実現なさるお方であると詩人は確信しているのです。

「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」

これは本当なのです。現実です。真実です。だから結論としては、「それゆえ、われらは恐れない」ということになります。この神が私の人生の真ん中におられるならば、恐れる必要がないのです。私の人生は揺るぐことはありません。否、私の人生ばかりでなく、私の家庭も、教会も揺るぐことがないのです。たとえ選挙で自民党が勝っても、戦争が起きても、砲弾が飛んできて、銃弾が頭の上を飛び交っても、揺るぐことはありません。なぜなら、世界を支配しているのは「万軍の主」イエス・キリストであられるからです。そして私たちキリスト者は、特別な神さまの守りの御手の中にあるからです。

私たちが意識していようがまいが、私たちは特別に神さまに守られています。私たちは分厚い強力な核シェルターの中に生かされています。どんなに槍や弓や砲弾が飛んできて届かない、高い櫓の上にあります。分厚く高い城壁に囲まれているのです。

11. 万軍の主はわれらとともにおられる。

ヤコブの神はわれらのとりでである。

それゆえ、我らは恐れない、揺るがない。もっともっと私たちはこう確信してよいのではないのでしょうか。この

事実は、確信して確信しすぎることはないと思います。むしろ確信しないで、私たちは、あまりに目の前にある、目に見える現実に振り回されてはいないでしょうか。そして、いつも恐れ、恐れで臆病になって、結局は何もしない、何も出来ないでいるのではないのでしょうか。そうならば、それは不信仰に他なりません。

それで神さまは、モーセにも、ヨシュアにも、そしてイエスさまの弟子たちにもこう言われました。「恐れてはならない。」

11. 万軍の主はわれらとともにおられる。

ヤコブの神はわれらのとりである。

私たちはキリストを信じて永遠のいのちをいただいたものです。生きるにしても死ぬにしても「万軍の主はわれらとともにおられ」ます。「ヤコブの神はわれらのとりで」です。たとえいのちを落として死んだとしても、それでも「万軍の主はわれらとともにおられ」ます。「ヤコブの神はわれらのとりで」なのです。死の力に打ち勝って復活されたイエスキリストは、永遠に我らと共におられるのです。私たちはそれぞれ何某かの戦争の状態に置かれているかも知れません(受験戦争、企業戦争)。戦乱の日々を生きる私たちも、詩人のように、神さまに絶対の信頼を置いて、大胆にみこころをなして生きていきたいと願います。